

# 転換期ジュネーヴの知識人たち

——スイスの視点から見た西欧社会経済思想史の一齣——

喜 多 見 洋

はじめに

- I. 転換期のジュネーヴ
  - II. リカードのジュネーヴ訪問
  - III. ジュネーヴの知識人たち
    - 1. エティエンヌ・デュモン
    - 2. ピエール・プレヴォ
    - 3. シスモンディ
  - IV. 知的活動
- 結 び

## abstract

From the second half of the eighteenth century to the first half of the nineteenth century Geneva had undergone great political and social changes. These changes were related to the development of European social thought. Taking these circumstances into consideration, this paper examines the activities of three famous intellectuals of those days: Etienne Dumont, Pierre Prévost, and Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi. These intellectuals were active in various fields including politics, and played very important roles in introducing and diffusing English social thought and social sciences to the Continent. Their activities show that intellectuals in Geneva held an interesting position in European intellectual history, and that the research took place in Geneva provides different perspectives on the understanding of economic thought.

## はじめに

フランス啓蒙思想を象徴する『百科全書』第7巻には「ジュネーヴ」という項目が収められている<sup>1)</sup>。ダランベールの筆になるこの項目では、ジュネーヴの地理的概観にはじまり、歴史、外

---

1) 『百科全書』第7巻の「ジュネーヴ」の項目については、[ルソー 1979]を参照。

交関係、産業、経済、政治制度、習俗、演劇、宗教等の諸問題が好意的に取り上げられている。そこで論じられているのは18世紀中葉のジュネーヴであるが、この町は現在ではスイス・ロマンドの中心都市となっており、永世中立国スイスを代表する都市の一つとあってよいだろう。だがジュネーヴは、それとはまた別な顔も持っている。この町はフランス国境に隣接し、スイスの中では少数派であるフランス語圏に属しているのである。そのうえ意外に思われるかもしれないが、チューリヒやベルン、バーゼルのような他のスイスの主要都市とは異なり、ジュネーヴがスイスに加わったのはかなりおそく、19世紀になってからで、現在のスイスを構成する23のカントン<sup>2)</sup>のうち、22番目の加盟ということになる。これらのことからわかるように、ジュネーヴという都市は、歴史的に見てスイスの中で、必ずしも「典型的なスイスの都市」、「スイスらしいスイスの都市」という存在ではない。けれども、むしろそのためにこの町は注目に値するのである。この点は、転換期のジュネーヴをさらに検討することによってはっきりするはずである。

なおここにいう「転換期ジュネーヴ」とは耳慣れない表現かもしれないが、18世紀から19世紀にかけての時期のジュネーヴを指している。この時期、ジュネーヴは、中世以来の都市国家である「ジュネーヴ共和国」から、フランスへの併合により「フランスの一都市」となり、最終的に「スイスの22番目のカントン」へとその政治的形態が大きく変化し、それとともにこの町の社会も変化している。もちろんこの町の変遷は、当時のヨーロッパにおける国際関係と密接にかかわっているわけだが、本稿では、こうした「転換期」のジュネーヴを、この町の知識人の知的活動との関連で検討してみたい。取り上げるのは、ベンサムの見解の普及、代弁者として知られているE.デュモン<sup>3)</sup>とジュネーヴのアカデミーの教授で哲学者、自然科学者であったP.プレヴォ<sup>4)</sup>そして歴史学者であり経済学者でもあったシスモンディ<sup>5)</sup>の三人である。但しこれらの人物を取り上げるのは、彼らが特に、その知的活動に関して興味深い存在だからであり、彼らの活動を手がかりにして、18世紀末から19世紀前半にかけての時期の西欧社会経済思想の交流と展開について考えてみたいからである。

そこで本稿は、まず転換期のジュネーヴを中心としてこの町を歴史的に見てみる。次に、上の知識人たちを取り上げ、主に彼らの知的活動について検討を加え、さらにそれが生み出したものは何か考えてみる。こうしたかたちで転換期ジュネーヴに注目することにより、当時の大国であるイギリスやフランスの視点でなく、スイスという小国の視点で西欧社会経済思想の交流と展開を捉えてみるのが本稿の課題である。

2) ただし23カントンのうちバーゼル、アッペンツェル、ウンターヴァルデンの3つは、それぞれバーゼル=シュタット (Basel-Stadt) とバーゼル=ラント (Basel-Land)、アッペンツェル・インナーローデン (Innerrhoden) とアッペンツェル・アウサーローデン (Ausserrhoden)、ニトヴァルデン (Nidwalden) とオブヴァルデン (Obwalden) という半カントンからなっている。半カントンとは、議会における投票権が半分しかないことを意味する。

3) Pierre Etienne Louis Dumont (1759-1829).

4) Pierre Prévost (1751-1839). プレヴォが残したマニユスクリプトは、ジュネーヴ大学公共図書館 (BPU) に保管されている。Cf. Ms. Suppl. 1048-1080 (Ms.Pévost).

5) Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi (1773-1842).

## I. 転換期のジュネーヴ

ここで取り上げる転換期までのジュネーヴは、どのような町だったのであろうか<sup>6)</sup>。まずこの点から考えてみたい。サヴォワの辺境にありレマン湖からローヌ河が流れ出す水運上の要衝に位置するジュネーヴは、もともと司教城館を核として自然成長的に形成された中世都市である。そしてこの町では、16世紀初頭以来、サヴォワ家と手を結んだ司教と住民の対立が頂点に達していた。ジュネーヴは1526年にベルンおよびフリブールとの間に同盟<sup>7)</sup>を結び、後ろ盾を得ており、特にベルンは、1528年宗教改革を受け入れ、さらにジュネーヴの宗教改革も支持し、この町にファレルを送り込んだ。彼の活躍等によりカトリック勢力を都市から追放することに成功したジュネーヴは1536年にベルンの軍事的支援を受けて、司教と完全に縁を切って事実上独立を達成している。その直後にジュネーヴを訪れ、ファレルからこの町の改革運動への協力を求められたカルヴァンが、後の「プロテスタントのローマ」としてのジュネーヴの基礎を築くのは周知のとおりである。結局、この間ジュネーヴは、この町にかかわる諸勢力のバランスをうまく利用しながら独立を維持したわけだが、その後も1577年にはカトリック内陸五邦がサヴォワと防衛同盟を結んだり、1586年には全カトリック邦が「黄金同盟」を結成したりするなどジュネーヴを取り巻く脅威は無くならなかった。そればかりか1602年12月には、ジュネーヴ支配をあきらめないサヴォワ公カルロ＝エマヌエーレ1世<sup>8)</sup>による有名な「エスカラード」<sup>9)</sup>と呼ばれる夜襲まで受けており、ジュネーヴがようやく独立を達成するのは、翌1603年のサン・ジュリアンの和約によってである。

以後ジュネーヴは、比較的順調に経済的發展を遂げるとともに、新教普及の中心地として盛んにフランスに向けて布教を行なった。そしてフランスだけでなくヨーロッパ各地から宗教的亡命者を受け入れながら、彼らの定住地としても、また一時的滞在地点としても重要な役割を果たしてきた。その意味でジュネーヴは当時のヨーロッパにおける国際都市であったといっていよう。だがこの町が受け入れた亡命者の数は、他の近隣の都市と比較しても多かった。1572年のサン・バルテルミーの虐殺事件や1685年の「ナントの王令」廃止の際に、この町はきわめて多くの亡命者を受け入れているし、それ以外の時期も各地から亡命者を受け入れ続けている。こうした人口流入により町の人口が増加するにつれて、ジュネーヴでは、社会問題が次第に顕在化することになるのである。

18世紀初めまでのジュネーヴはおおよそ以上のように考えられるが、ここでジュネーヴの社会構造を簡単に整理しておきたい。町の行政をつかさどるのは、小市参事会 (le Petit Conseil) であり、立法をつかさどるのは市民総会 (le Conseil Général) および拡大市参事会 (le Conseil de

6) ジュネーヴ史の概略については、次の文献を参照されたい。Binz [1981]

7) ただし1534年、カトリック邦であるフリブールは、ジュネーヴに対し同盟破棄を通告する。

8) Carlo Emanuele I (1562-1630) .

9) Escaladeとは、直訳すれば「梯子を使った攻撃、梯子作戦」といった訳になるが、現在ではジュネーヴの冬の盛大な祭りとなっている。

Deux Cents) であった。そして趨勢として市民権の付与に関して閉鎖化の傾向が見られるという点では、ジュネーヴも近隣のスイス諸都市と大差なかった。けれども門閥政治をめぐるこの町の内部対立は大変激しく、「革命の実験室」と表現されるほどであった。これには、ジュネーヴの場合、農村の支配領域が小さかったため、ほかの都市のように農村の抵抗にたいして都市全体が一致団結する必要性が低かったことなどが影響していると思われる。しかし何といてもジュネーヴの最大の特徴は、その社会が市政への参与権に設けられた差別によって次のような階層に区分される点にある。すなわちジュネーヴの住民は、余所者を除いて、(1)シトワイヤン(citoyen)、(2)ブルジョワ(bourgeois)、(3)ナティブ(natif)、(4)アビタン(habitant)という四つの階層に区分されているのであった<sup>10)</sup>。このうち参政権をもった市民はシトワイヤンとブルジョワであったが、シトワイヤンこそが完全な市民で、特権階級の中核を構成していたといえる。彼らの代表24名が構成する小市参事会が市政を牛耳り、市民権の付与も行なっていた。そしてもともとシトワイヤン以外の人々も市民権を購入することができたのだが、時代が下るにつれて市民権の購入費用は高額となり、17世紀中頃には豊かでない人々がブルジョワになることは事実上不可能になってしまう。ブルジョワは市民総会にシトワイヤンと同様に出席できた。けれども彼らは拡大市参事会員に例外的に選ばれることはあっても、小市参事会員にはなれなかった。ただしブルジョワの場合は息子の代になると、シトワイヤンの称号とそれにとまなう権利を獲得できたのだが、それでも経済力のあるブルジョワは不満を募らせ、より多くの権利を求めてシトワイヤンと対立することが多くなっていた。他方、参政権をもたない住民も多数いた。彼らの多くは新しい産業を支える労働者で、アビタンやナティブと呼ばれる階層であった。アビタンは職を求めてジュネーヴにやって来た文字どおりの新来者で、ナティブは新来者の子孫で定住権を得ただけの人々であった。定住権を得ただけで参政権を与えられず、社会的に不利な立場に置かれていた彼らもまた政治的発言権を求める機会を狙っていた。

このように他の近隣都市には見られない特有の社会構造を持っていたジュネーヴであるが、この町でも門閥制の傾向はしだいに強まり、18世紀初頭には市民総会は形骸化して、権限は拡大市参事会、特に小市参事会の手に移されていた。そのために不満をもったブルジョワを中心とした勢力は、市民総会の権限をもとの状態にもどすよう求めて1704年に暴動をおこす。あえて源をたどれば、ここに転換期ジュネーヴの発端を見いだすこともできるだろうし、それはまた18世紀にこの町が経験した民主化をめぐる闘争、いわゆる「ジュネーヴの革命」のはじまりをも意味していた。しかし運動自体は、ベルン、チューリヒ、フランスの干渉を受けて失敗し、指導者も処刑されてしまう。ところが1715年に始まる市の城壁整備は新たな展開を見せる。市民総会に諮らずに決定された城壁整備のための課税のせいで住民の間に不満が募り、ブルジョワを中心とした勢力が、1737年に再び蜂起して勝利を収めるのである。結局1738年に、ベルン、チューリヒ、フランスの仲介によって事態の收拾がはかられ、「調停規定」(Règlement de la Méditation) が定め

10) この他に、市外のジュネーヴ領に住む農民などを(5)隷属民(sujet)として加えることも可能である。

られて、課税の受け入れを条件に、市民総会が共和国の最高機関で、完全な主権を持つことが公式に宣言された<sup>11)</sup>。これによってブルジョワの権利がある程度認められた。

以後の四半世紀<sup>12)</sup>は相対的に平穏だといえるが、1762年になるとジャン・ジャック・ルソーの書物をめぐってジュネーヴの闘争は新たな展開を見せる。ジュネーヴ市当局が、市役所の前でルソーの著作『社会契約論』と『エミール』を焚書にしたのである。これに対し、ルソーは文書による闘争を開始するし、市民の一部はルソーの有罪に抗議して「représentations」と呼ばれる請願書を政府に提出する。ブルジョワを中心とした抗議する人々に与えられた「Représentants」という名は、ここに由来する。他方、この請願書を尊重しないという政府の対応を支持した特権階級の人々は「Négatifs」という名で呼ばれる。このルプレザンタンとネガティブは、ルソーの事件にとどまらず自由、平等、人民主権等の問題をめぐって論争を繰り広げ、結局1768年に市民総会は拡大市参事会の半数のメンバーを選出できる権利を獲得した。つまりブルジョワが権利を拡大したわけだが、その後、依然として不利な立場に置かれていたナティブも自らの政治的権利を要求し始めた。こうした事態にルプレザンタンの指導者たちも、ナティブがシトワイヤンと同等に扱われるべきだと考えて、特権階級との闘争が再び活発化する。

そして1781年1月、住民が蜂起しブルジョワとナティブは町を占拠する。これによりジュネーヴには一時的に民主的共和体制が成立するものの、長くは続かない。翌1782年のベルンとフランスの軍事介入によって旧秩序が復活し、共和体制を支えた主要な人々は追放されてしまう<sup>13)</sup>。当然ながら復活した体制は反動的なものであり、社会的騒乱をさけるためとして集会の自由、出版の自由等の権利には制限が加えられた。こうした体制への不満が爆発するのは、1789年のことである。1789年1月、政府がパンの価格を引き上げると、サン・ジェルベ地区で暴動が起こる。値上げは取り消され、秩序を維持し民衆の反乱を避けるため1782年以来、敵対していた特権階級とルプレザンタンが和解することになる。そのためこれに続く3年間、反動的体制は自由化され、住民は、彼らの権利を回復、増大する。しかしジュネーヴは、もはや自らの意思で将来を決定できる状況にはなかった。この町の運命は、フランス革命の展開に大きく左右されることになる。1792年9月にフランス軍がサヴォワを征服し、ジュネーヴを併合しようとした時は、かろうじて独立が維持されたものの、革命フランスによるジュネーヴ包囲は、結果的に1792年12月、この町に新政府を誕生させ、あらゆる階層の住民の政治的平等が宣言される。フランスとは異なりジュネーヴの新政府は、穏健なブルジョワによって節度ある仕方で運営され、1794年2月には民主的憲法も可決される。ところが事態は7月に急変する。一部の極端な人々が蜂起し、彼らが人民の

11) Binzは、「この「調停規定」は30年間憲法として役立つ。」(Binz [1981], p.42)と述べている。

12) この間1749年にはフランスと、1754年にはサルデーニャ王国となったサヴォワと「境界条約」が、それぞれ調印されている。これによりジュネーヴと外国の権利が田園部分で重なっていた中世の残滓が清算され、以後ジュネーヴは、完全にその農村領土 (territoire rural) の主となる。

13) この時追放された改革派ルプレザンタンの指導者のうち一部は、パリに亡命する。彼らはそこに共和主義的思想を持ち込み、ミラボーの周辺に在ってフランス革命の初期に少なからぬ影響を及ぼしたことで知られている。この点についてはBénétruy [1962]を参照。

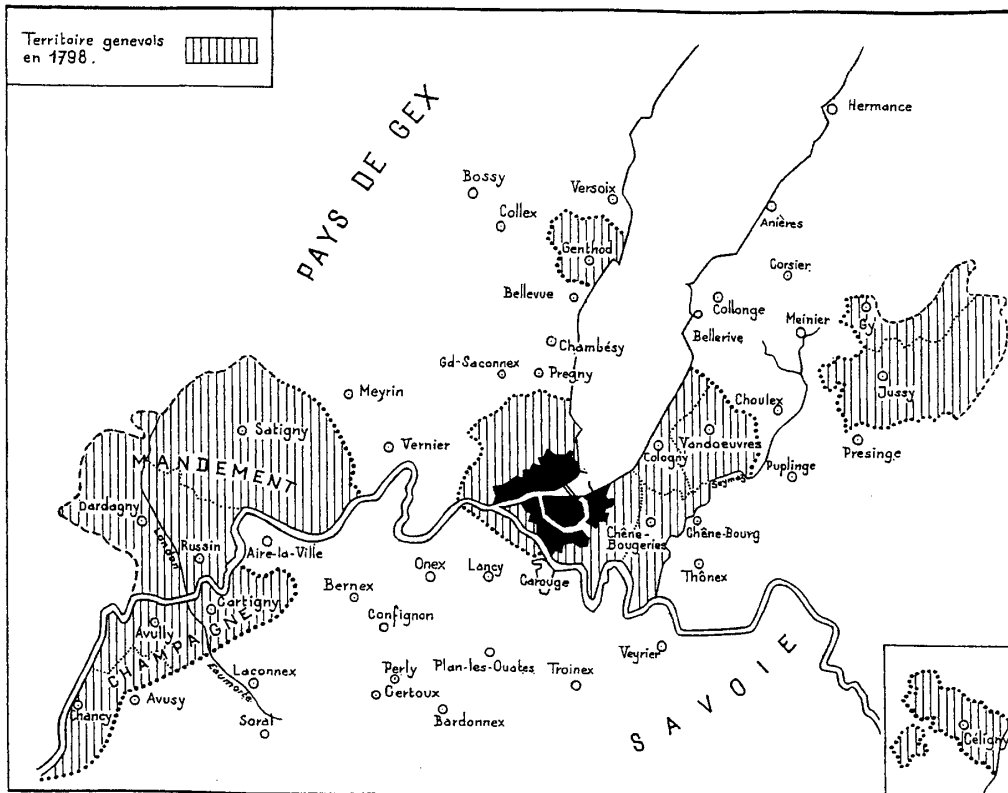


図1 フランス併合前のジュネーヴ<sup>14)</sup>

敵と考える人々を、フランスの恐怖政治の例に倣って処罰するのである。さらに事態は厄介な方向に展開するかに見えたが、フランスでロペスピエールの失脚と死によりフランスで恐怖政治が終わると、それはジュネーヴにも波及し、9月には立憲政体が再建される。ただしこの体制も長くは続かなかった。当時、図1のような領土を保有していたジュネーヴは、1798年にフランスに併合されてしまうのである。

フランス併合期には新しい県、レマン県が創られる。わずか10数年であるが、ジュネーヴはその県庁所在地としてフランスの一都市となり、行政から政治、経済にいたるすべての領域で地域の中心都市の役割を果たした。とはいえジュネーヴの人々は、新秩序に関与することにはほとんどが消極的であった。もともと「外国の」強力な駐留部隊や役人の存在に、良い感情を抱いておらず、戦争や大陸封鎖による経済の不振もあり、大帝国内に統合され埋没してしまうのをひそかに拒んでいたといつてよいであろう。そのためライプツヒでフランス軍が敗北すると、早くも1813年末には主権国家ジュネーヴが復活する。しかしウィーン体制下のヨーロッパは、もはや都市国家の時代ではなかった。新時代への対応を余儀なくされたジュネーヴは、国際状況等を考慮し、1815年、22番目のカントンとしてスイスに加盟する。同じ年、次ページの図2にあるようにレマン湖岸にそった狭い地域ヴェルソワがフランスから割譲され、飛び地だったジュネーヴはヴォーと陸続きになる。さらに1816年には、やはりレマン湖岸の地域および町の南側の地域をサル

14) 図1 および図2 は、Eugène-Louis Dumontが作成しBinz [1981] の53ページに収録されている図に、加筆したものである。

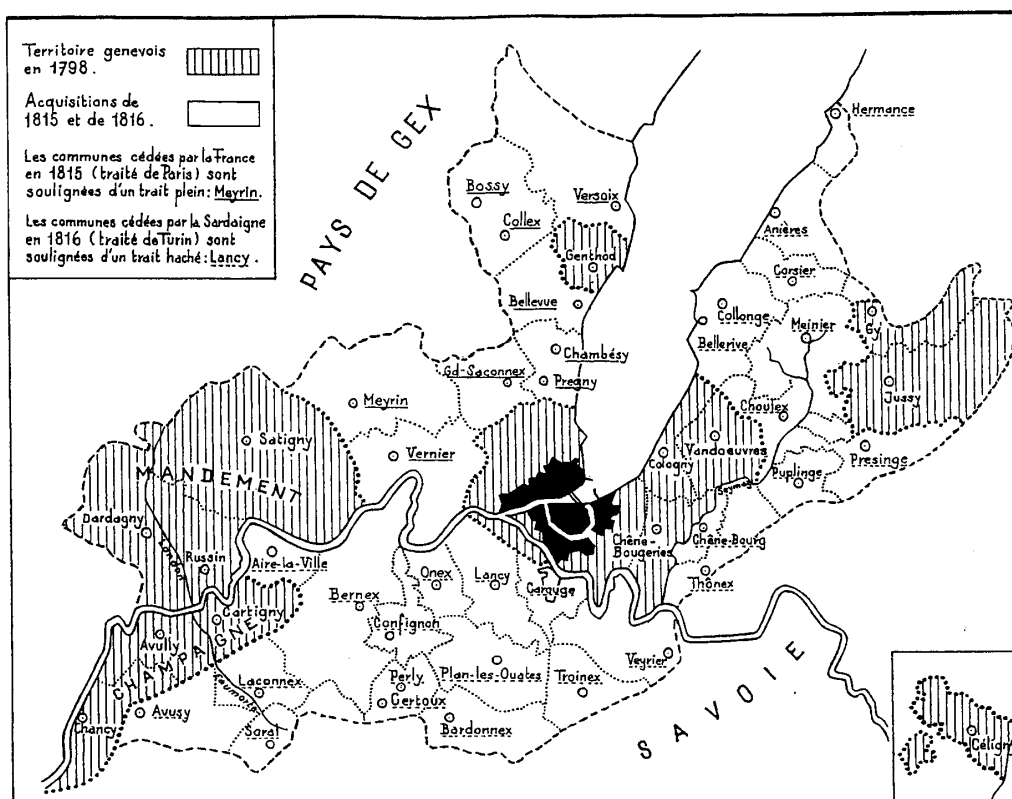


図2 領土獲得後のジュネーブ

デーニュから割譲され、ほぼ今日のジュネーヴの領域が整う。

こう見てみるとスイスに加わるまでの「ジュネーヴ共和国」の歴史は、中世都市ジュネーヴが、サヴォワ家や司教、フランスおよび他都市（ベルン）の勢力バランスを利用しつつ、それらの干渉を巧みに排除し、独立を維持して町を發展させていった歴史といえる。スイス加盟後も、ジュネーヴは、スイスのゆるやかな連邦制のメリットを活かして發展を続けながら、数多くの有能な人材を輩出し、スイス・ロマンドの中心都市として連邦の運命を大きく左右することになる<sup>15)</sup>。そして今日でもこの町は、フランスの周辺にあって、フランスには属さず、またスイスの中でも歴史的、言語的、政治的に少数派の位置にあって、中心的存在ではない。つまりフランスとスイスの「境界部分」に位置する微妙な存在であり続けているのである。

転換期ジュネーヴを中心としたこの町の歴史はおおよそ以上のように整理できる。だがそれでは上に述べた転換期にジュネーヴの知識人たちはどのような知的活動をしていたのであろうか。

## II. リカードのジュネーヴ訪問

ここでわれわれは、当時のジュネーヴの知識人たちが、形成していたジュネーヴの知的世界に

15) この点は、1815年の第二回パリ会議におけるピクテ・ド・ロシュモン、1847年の分離同盟戦争における連邦軍司令長官デュフル將軍、1864年の国際赤十字の設立におけるアンリ＝デュナンとといったジュネーヴ人の活躍を考えれば容易にうなずけるであろう。

目を向けてみることにしよう。次の引用文は、1822年イギリスの経済学者D.リカードがジュネーヴを訪問した折に、デュモン宅に招かれた時のものであるが、これによりわれわれは、当時のジュネーヴに生まれていた知的交流の場の様子を垣間見ることができるだろう。

「火曜日に私はデュモン氏宅で食事にあずかり、たいそう快い一日を過ごしました。集まったのは、ベロ氏、ブロイ公爵、シモンド氏、シスモンディ氏、ド・ラ・リーヴ氏、および故サー・サミュエル・ロミリの長男のロミリ氏でした。食後プレヴォ氏が仲間に加わりました。これら一同の紳士がたは、私にたいしてこのうえない親切と注目をはらってくださいました。ですから、私はいつでもこのジュネーヴ訪問のことを嬉しく思いだすでしょう。デュモン氏は私たちにすばらしいご馳走を振舞ってください、しかもいつものようにすばらしく上機嫌で、座の陽気な気分を大いに盛りあげてくださいました。話題は大半が経済学の諸主題に関するものでしたが、それらについて私が多くを言う必要はありませんでした、というのは公爵の意見が私と完全に一致しており、しかも公爵の弁舌が非常に上手であったために、経済学上の原理の弁護が私一人に委ねられた場合に私が抗弁し得たであろうと思われるよりもはるかに立派に、私たち両者の意見の一致を見ている諸原理について抗弁して下さったからからです。また、なおもう一つ付言しますと、「発言」をめぐって非常な競争があり、その機会をとらえるのがとても困難でしたが、それはシスモンディ氏と公爵とが短い演説とでもいべきものを行ったことにもよるのです。……………」<sup>16)</sup>

これはリカードが、彼の家族に宛てた1822年9月19日付けの手紙からの引用である。1822年、つまりリカードが亡くなる前年の7月から12月にかけて、彼が家族とともに大陸旅行をして、ジュネーヴに立ち寄った時の状況が描かれている<sup>17)</sup>。引用には、ここで取り上げる人物の一人であるデュモンの家で、リカードの訪問を受けてジュネーヴの「交際仲間」<sup>18)</sup>が集まった様子が記されている。そこには、シスモンディやプレヴォ、ベロ、ブロイ公爵、シモンド、ド・ラ・リーヴ、およびロミリ等の名前が見られ、当時のジュネーヴの知識人たちの交友関係、交流を知る貴重な手がかりとなっている。

ここに登場している人物たちのうち、以下で取り上げるデュモン、プレヴォ、シスモンディを

16) Ricardo [1955], pp.337-8. またリカードは、同様の内容の手紙を、J.ミルにも送っている。「私のこの前の手紙はジュネーヴから発送しました、われわれの友人デュモンと食事をともにすることになっていた日でした。彼の家で非常に愉快的な仲間に出会いました。また彼はわれわれに私がジュネーヴで経験したもっとも立派な午餐を振舞ってくれました。シスモンディ氏、シモンド氏、ド・ブロイ公爵、ド・ラ・リーヴ氏、ベロ氏、プレヴォ氏、小ロミリ氏、それともう一人名前を忘れた紳士がわれわれの友人のもてなしにあずかりました。彼は田舎の邸宅にたいへん居心地よく住んでおり、またジュネーヴの交際仲間のあいだで非常に尊敬されている様子です。」(Ricardo [1952], p.244.)

17) リカードの大陸旅行については、次の文献を参照されたい。Cf. Ricardo [1952], pp.268-9.]

18) Ricardo [1952], p.244.



除いた、その他の人物について簡単に触れておこう。ペロ<sup>19)</sup>は、ジュネーヴのアカデミーの民法および商法の名誉教授、ブロイ公爵<sup>20)</sup>は、故スタール夫人の娘婿、シモンド<sup>21)</sup>は、フランスの商人でスイス旅行記を著している。ド・ラ・リーヴ<sup>22)</sup>は、アカデミーの薬化学の名誉教授、そしてロミリ<sup>23)</sup>は手紙にあるように、故サー・サミュエル・ロミリの長男である。いずれも著名な人物であるが、彼らのうちシモンドとロミリは、この町の長期滞在者で、残りはジュネーヴ人ということになる。ナポレオンが失脚し、ジュネーヴがスイスに加わった19世紀はじめには、こうした人々がこの町にそろい、そこではわれわれが上の手紙から知ることができるように、様々な問題について自由に議論を展開していたのである。行なわれている会話が、かなり学問的であることは、引用の後半部分から推測できるが、さらに同時期の別な手紙では、リカードは次のようにも述べている。

「……………情報のほとんどは昨日ブロイ公爵の家でデュモン氏といっしょに食事をしたさい行なわれた会話から得たものです。彼は、コペのマダム・ド・スタールの邸宅に住んでいます。シスモンディ氏がそこにきていて、われわれの会話はもっぱら政治と、経済学にむけられました。シスモンディ氏は、ご承知のように後者の科学にかんしてはマルサス氏の意見を多くもっていて、それを非常に大胆に提出しました。だが非常に上手にはなかったと思います。彼は、公爵と私が彼の体系にたいして唱えた異論への応答に窮し、それらには答えることができるとだけ言うに甘んじることがしばしばでした——それらには即座に答えられないがこれは確かだと言って。」<sup>24)</sup>

もちろん、手紙の書き手がリカードであり、受け取った人物がJ.ミルなのだから、内容が学問的なのは不思議でないが、前年（1821年）に『経済学および課税の原理』第3版を出したリカードと1819年に『経済学新原理』初版<sup>25)</sup>を出したシスモンディという当時の主要な経済学者二人が、デュモン等が同席する場で経済、社会に関する議論を交わしているのである。また、この場での議論についてリカードは、トラワにあてた別の手紙では次のように述べている。

「一日そこ [=コペ] で彼 [=ブロイ公爵] と食事をともにしたさい、経済学の本を出版したことがあり、また私の意見にたいしてまったく反対のシスモンディ氏が公爵邸を訪問していたのです。シスモンディ氏は独自の意見を述べ、公爵と私がそれを反駁しました——しかし論

19) Pierre-François Bellot (1776-1836).

20) Victor de Broglie (1785-1870?).

21) Louis-Simond (1767-1831).

22) Charles-Gaspard de la Rive (1770-1834).

23) William Romilly (1798-1855).

24) Ricardo [1952], pp.241-2.

25) Sismondi [1819] 参照。

争の困難な部分は主として公爵の方にかかりました、公爵はわれわれの共通の原理をじつに見事に擁護し、これにはシスモンディ氏も太刀打ちできないと私に思えたほどでした。じっさいシスモンディ氏は、一、二回反駁された論点について答弁できないと白状しました、しかしそれらが応答しえないものだとはけっして認めようとしませんでした。デュモン氏とプロイ夫人が審判官格で同席していましたが、彼らは公明な勝負をみまもるために発言しただけでした。……………シスモンディ氏とは経済学の学説のうえて意見を異にしているにもかかわらず、私は彼の才能には大いに敬服しており、また彼の態度に非常に好感をおぼえました——彼の論争的な著作を読んだところからは彼があのように淡泊で気持のよい人物であろうとは予想しませんでした。シスモンディ氏は広い視野をもち、また人類の幸福に大いに役立つと彼の考える原理を確立したいと真剣に願っています。彼はあらゆる国における人民大衆の困窮の大きな原因は財産の不平等な分配であり、それが下層階級を獣にし堕落させる傾向があると考えています。人間を向上させ、無思慮な結婚を避けさせる方法は、彼に財産をあたえ、公共の福祉にたいする関心をよびさますことである、——この点まではわれわれも大賛成です、しかし機械や、その他の手段によって生ずる生産の豊かさが、不平等な財産分配の原因であり、この豊かな生産がつづくかぎり彼のいづく目的は達成されないと彼が主張するとき、彼は問題をまったく誤解しており、彼の前提と結論との関連を証明することに成功していない、と私は思います。』<sup>26)</sup>

かなり細かい議論が繰り広げられていたことが推測できるのであろう。しかも議論の場は、ジュネーヴに近いコペのブロイ公爵邸である。ジュネーヴ近郊とはいえコペは、フランスにも、ジュネーヴ・カントンにも属しておらずヴォー・カントンの西の端に位置している。こうしてこの時代、ジュネーヴにしるコペにしる近代国民国家の境界的部分に、ある種の知的空間が成立していたのである<sup>27)</sup>。

当時成立していた知的空間の雰囲気的一端がつかめたと思うが、それでは、上のデュモン邸での集まりに居合わせた人物たちのうち、後まわしにしていた三名を取り上げることにしよう。

### Ⅲ. ジュネーヴの知識人たち

これら三人を取り上げるのは、単に彼らがこの時期のジュネーヴの代表的知識人だからというわけではない。経済思想史や社会思想史の視点から見て、彼らが従来考えられている以上に重要な存在だからである。そこでまずデュモンである。

26) Ricardo [1952], pp.269-71.

27) ちなみに成立していたのは知的空間だけではない。やはりジュネーヴ近郊のジェックスやサヴォワなどを見れば分かるように、フランスとの境界的部分に経済空間も成立していた。この問題についてはGuichonne [2001] が詳しい。

## 1. エティエンヌ・デュモン

エティエンヌ・デュモンは、ジュネーヴの思想家である。ここで彼の生涯を簡単にたどっておこう。デュモンは、1759年ジュネーヴに生まれている。姉が4人で末っ子の彼は、5歳の時に父を亡くし、母によって育てられている。成長した彼は牧師になったが、当時のジュネーヴは上に述べたルプレザンタンとネガティブの激しい闘争の最中であり、彼もこれに巻き込まれてしまう。まだ若かった彼は、ルプレザンタンの指導者ではなかったものの、その一員であった。彼は、1782年のこの町の騒乱に関与して亡命したわけではない。だが、牧師としての彼の発言が当時の町の状況との関連で問題となり、ネガティブの批判によってジュネーヴを離れざるを得なくなったのである。町を出た彼は、当時、姉の一家が暮らしていたペテルスブルグを経て1786年にイギリスに渡り、当時の有力な貴族であるランズダウン卿に秘書兼、子息の家庭教師として登用される。以後デュモンは、四半世紀以上を主にイギリスで暮らし、この間にベンサムを知遇を得て、終世彼の著作を世に出すのに尽力することになる。またフランス革命が勃発した際には、その初期にパリに行き、エティエンヌ・クラヴィエール<sup>28)</sup>、ジャック・デュロヴレー<sup>29)</sup>等のジュネーヴからの亡命者とともにミラボーの側近として活動し、革命を実際に体験している<sup>30)</sup>。その後、革命が急進化する前に、彼はイギリスに戻るが、1814年のナポレオン体制の崩壊とともにジュネーヴに帰る。そして彼は、そこでConseil représentatifの一員として政治に参加し、亡くなるまで今日のジュネーヴの基礎を築くのに大きな貢献をしたとされている<sup>31)</sup>。

このようにけっして平穏とはいえない生涯を送ったデュモンであるが、思想家としての彼は、今日では、一般にベンサム理論の普及者、もしくはミラボーの協力者として知られている。これは、デュモンが行なった『民事および刑事立法論』<sup>32)</sup> (1802)をはじめとするベンサムの著作の編纂、翻訳やデュモン自身の著作である『ミラボーの思い出』<sup>33)</sup> (1832) 等から考えると無理のないことかもしれない。そしてあまり多いとはいえないこれまでのデュモンについての研究も、こうした彼の業績にもとづいたものが多い。だがそれらの著作や研究は、彼の実際の姿を明らかにしているというよりも、その一面を示しているにすぎない。ジュネーヴ大学公共図書館(BPU)には彼が残した膨大なマニュスクリプトが所蔵されているが、それらを細かく検討すれば、18世紀末から19世紀にかけてのヨーロッパ社会において、彼がいかに重要な存在であったかということが分かる<sup>34)</sup>。というのは、彼は、フランス革命期からナポレオンによるヨーロッパ支配の期間を通じて当時のヨーロッパ社会の大変動をイギリス、フランスという異国で体験しており、しか

28) Etienne Clavière, (1735-1793). 革命期にフランスの財務大臣にまでなる彼もジュネーヴ人であり、ルプレザンタンの指導者の一人であった。同時に彼は、J.-B.セーの父親の「同郷の友人」でもあった。

29) Jacques-Antoine Du Roveray (1747-1814).

30) フランス革命期のデュモンについてはDumont [1832] が参考になる。

31) デュモンの生涯と業績については、長谷川 [2000]. Sismondi [1829], Martin [1942] を参照。

32) Bentham [1802] 参照。

33) Dumont [1832] 参照。

34) デュモンが残したマニュスクリプトの詳細については喜多見 [1999] を参照。

もそこで彼はその人柄を活かして多くの人々と交友関係を築いているからである。この豊富な経験とそれから生まれた幅広い人脈が、思想家デュモンを生み出したのであり、経済思想史の側面から見ても、リカード、マルサス、セー<sup>35)</sup>、シスモンディと彼の知的交流は、さらに検討を要する内容を含んでいる。たとえばセーと彼の親密な関係は、19世紀前半における功利主義と経済学との関係を考える上で興味ぶかいものであり、その一部はすでに筆者が明らかにしておりである<sup>36)</sup>。そんなわけでジュネーヴ訪問時の手紙で、リカードが、マルサスやJ.ミル、エッジワースに対し、デュモンのことを「われわれの友人」といった表現で親しげに書いているのも別に不思議ではないし、またリカードが自分の家族への手紙でデュモンについて次のような評価をしているのも納得がゆくだろう。

「………… デュモン氏は私たちにとって大きな掘り出しものでした。彼ほどいやみがなくて愉快でうち解けた人物と近付きになれることはまたとないでしょう。私は、デュモン氏をたえず好もしく思い彼に敬服してきたのですが、私の彼に対する好意と称賛と敬意の念がさらに増したのは、彼が哲学者ならびに立法者として非常に顕著な地位を保持しているジュネーヴで彼に会ってからのことでした。彼には多分に茶目っ気がありますので、彼のバーサとの会話の一つ二つを耳にしたならば、あなたたちはさぞかし楽しくなることでしょう。」<sup>37)</sup>

結局デュモンの場合は、1782年から1814年までほとんどジュネーヴにおらず、外からジュネーヴを眺めることになった。だがそれは、デュモンにとってもこの町にとってもマイナスではなかった。この間彼は、町のあり方に実際に関与することはほとんどできなかったが、イギリスではランズダウン卿のもとで、この国の議会制民主主義の機能を目の当たりにし、フランスではミラボーの傍らでフランス革命の現場を体験している。このような豊富な経験と、さらにそれから生まれた幅広い人脈が、ジュネーヴに帰郷してから十二分に活かされるのである。

## 2. ピエール・プレヴォ

ではピエール・プレヴォは、どのような人物であろうか。彼は、ジュネーヴのアカデミーの物理学教授であり、一般に哲学者、自然科学者として知られているが、経済問題に関しても多くの論考を残している。

彼の生涯を簡単にたどっておくと、プレヴォは、1751年ジュネーヴに生まれている。そこで育ち、この町のアカデミーで神学、法学を学んだ彼は、1773年に学士の称号を得ている。その後、オランダで一年間、家庭教師をしてから、イギリスを旅行し、パリへ行き、De Lessert家の家庭教師となっている。プレヴォは、この町でJ.-J.ルソーと知り合い、Euripideの悲劇のすぐれた翻

35) Jean-Baptiste Say, (1767-1832).

36) Kitami [2000a], Kitami [2000b], Potier & Tiran [2003], 喜多見 [2000], 喜多見 [2001] 参照。

37) Ricardo [1955], p.331.

訳により、文学者として世に出る。そしてそれがフリードリヒ2世の目にとまり、1780年にベルリンでプロシア科学アカデミー会員ならびに l'académie des noblesの教授に任命される。彼はそこで文献学および化学を研究し、経済学に関するいくつかの論考も著わしているが、父の病気もあり、1784年にプロシアでの職を辞し、ジュネーヴのアカデミーで文学の教授に就任する。故郷に戻った彼は、まもなくこうした学術教育面での活動に加え、政治面でも活躍するようになる。すなわちプレヴォは、1786年にジュネーヴの拡大市参事会のメンバーに加わり、新政府誕生後の1793年には、国民議会 (l'Assemblée nationale) のメンバーにもなっている<sup>38)</sup>。また彼は、同じ年に物理学および哲学の教授に任命されている。こうして研究、教育の面では順調であったが、これで彼の生涯がすべて平穏というわけにはいかなかった。彼もまた時代の影響を被っている。1794年の夏にジュネーヴの市政を握った革命派は、プレヴォを反革命容疑者として逮捕し、投獄するのである。幸い20日間で釈放された後も彼は教員生活を続けるが、1798年になると今度は、ジュネーヴのフランスへの併合を実施する委員会に加えられ、併合下のジュネーヴではフランス学士院の通信会員になっている。そして1814年にフランスへの併合が終り、ジュネーヴがようやく独立を取り戻すと、彼はConseil représentatifの一員に加わる。そこで彼は能力を発揮するが、1823年に公職を全て辞任し、残りの生涯を学術研究に捧げて1839年4月に亡くなっている。

こうしてみるとプレヴォの生涯は、全体としてはジュネーヴの学者の平穏な生涯といえるであろう。1794年の投獄が目につくくらいであるが、ポイントとなるのは、彼が1782年の騒乱の際はジュネーヴにおらず、そのため本来なら年齢からいってもルプレザンタンとネガティブの闘争に巻き込まれてよいはずなのに、それを免れているということである。一方、彼の知的活動のうちで社会思想史的に最も注目すべきものは、マルサスの『人口の原理』の仏訳<sup>39)</sup>であろう。彼は、1809年と1823年、1830年にその仏訳を出版しており、マルサスの見解に近かったプレヴォはこれらの仏訳によってマルサス人口論のヨーロッパ大陸への普及に寄与したといえるのである。また経済学についていえば、彼自身ジュネーヴのアカデミーで経済学を講義しており、彼が残した講義ノートは19世紀初めにヨーロッパ大陸のフランス語圏のアカデミーでどのような講義が行なわれていたのかを示す貴重な資料となっている。さらに彼のマニュスクリプトの中に残されている手紙は、プレヴォがJ.-B.セーやマルサス、カゼノウヴらと経済学的内容について書簡を通じてやり取りしていたことを示している<sup>40)</sup>。そのうえ彼の長い教員生活は、多くの教え子を生み出しており、次に取り上げるシスモンディもそうした教え子の一人である。

### 3. シスモンディ

シスモンディ<sup>41)</sup>は、プレヴォやデュモンと比べると一番若く、1773年ジュネーヴに生まれ、

38) だがプレヴォは、4ヶ月で国民議会の議員を辞めてしまう。詳しい事情は明らかでないが、彼の穏健な思想が、彼の同僚のそれと合わなかったといわれている。

39) Malthus [1809], Malthus [1823].

40) これらの手紙のうちセーがプレヴォに宛てた手紙についてはKitami [1999] で紹介している。

41) シスモンディの業績と生涯については、de Salis [1932] を参照。

この町で育っている。従って、直接この町の騒乱に巻き込まれることはなかった。だが彼にしても、時代の影響を大きく受けている。それは、主に彼の父ジュデオン=フランソワ・シモンド<sup>42)</sup>をつうじてであった。彼の父は、シスモンディが生まれた当時は聖職にあったが、1778年に引退し、改革派ルプレザンタンが町から追放された1782年に、拡大市参事会員に選ばれている。つまり彼の父は、ジュネーヴの旧秩序を維持しようとする守旧派ネガティブであり、そのため彼の一家は後にジュネーヴの革命とフランス革命の影響をまともに受けることになる。一家は、まず1789年にフランス革命の勃発で経済的打撃を受ける。シスモンディ自身も学業を断念して、リヨンで商店員として働くことになる。彼は熱心に働いたようだが、革命がフランス社会にもたらした混乱もあり、1年ほどでリヨンからジュネーヴに戻る。しかし、故郷ジュネーヴも以前から続く町の社会的、政治的混乱に加えて、フランス革命とそれともなうヨーロッパ社会の混乱の影響をまともに被っていた。そして1792年に行なわれたフランスのサヴォワ併合はジュネーヴの独立までおびやかす、結果的にこの町に改革派の政府を生み出す。だが事態は依然として流動的であり、1794年7月におこった蜂起では、多くの者が投獄され、彼の父も投獄されてしまう。幸いシスモンディの父は処刑されずに釈放されたので、一家はイタリアに亡命して、フィレンツェに近いペッシャに住む。こうして彼は、家族とともに一家で亡命者となったのである。だがフランス革命の波は、ペッシャにもおよぶ。1796年6月フランス軍のトスカナ侵攻の際、シスモンディ自身が、フランス側によって投獄され、1799年には、反対にオーストリア（反革命）側によって投獄されてしまう。両陣営から投獄されるという心境はおそらく複雑なものであろうが、このような経験を経て、1800年シスモンディはフランス併合下のジュネーヴに戻っている。そして知識人シスモンディの活動はここから本格化すると考えてよいだろう。

故郷に戻った彼は、はじめは商業・技術・農業委員会の書記、次に1806年には商業会議所の書記となりジュネーヴの経済問題に直接たずさわるが、この頃から活発に知的活動を行なっている。彼は1801年には『トスカナ農業概観』<sup>43)</sup>を出版し、1803年にも『商業の富』<sup>44)</sup>を出しており、1804年頃からはスタール夫人のサロンに常連として参加するようになる。彼にはすでに『商業の富』出版後からリトアニアのビリニユス（Vilnius）大学経済学講座への教授職招聘の申し出があり、その他にも、後にはジュネーヴのアカデミーの現代史講座教授職などいくつかの申し出があった。だが彼はいずれも辞退し、ジュネーヴで知的活動を続けている。また1813年以来何度かパリを訪問し、モルレ、デュボン・ド・ヌムール、シャトーブリアンらと交友関係を結んでおり、特に1815年の訪問では、ナポレオンとの会見も実現している。そして1814年の独立回復後は、Conseil représentatifとしてジュネーヴの発展に貢献している。晩年はフランス学士院の外国会員に選ばれ、スイスの立憲議会（l'Assemblée constituante）の議員にもなるが、1842年6月に死亡している。

42) Gédéon=François Simonde, (1740-1810).

43) Sismondi [1801].

44) Sismondi [1803].

このようにシスモンディの知的活動は多方面にわたっているが、ここでは経済学者としての活動に注目したい。まず彼は、1819年に経済学上の主著『経済学新原理』を出版しており、過剰生産や、機械の問題でリカードやセーの見解に異論を唱えたのはよく知られているとおりである。上で見たリカードがジュネーヴを訪問した際のデュモン邸やコペでの議論も、そうした文脈で生まれたものである。また、さらに検討を要する問題であるが、シスモンディの見解と、マルサス、プレヴォの見解に類似が見られることも指摘しておきたい。これにはやはりプレヴォとシスモンディがアカデミーで師弟関係にあり、その後も親しかったということが影響しているように思われる。

#### IV. 知的活動

Ⅲではデュモン、プレヴォ、シスモンディという3人のジュネーヴ知識人をとりあげた。上に示したように、このうちデュモンとシスモンディは若い時期からいわゆる「ジュネーヴの革命」とフランス革命の影響を少なからず被り、外国への長期滞在あるいは亡命を余儀なくされ、自ずとジュネーヴの外の世界と交流を深め、全ヨーロッパ規模で幅広い人脈を築くことになった。プレヴォにしても18世紀後半にヨーロッパ諸国を遍歴し、各国の知識人と広く知的交流を重ねていた。そしてナポレオンが失脚し、ジュネーヴがスイスに加わった19世紀初めには、これらの知識人たちがこの町にそろい、そこにはわれわれがⅡで見たような、知的空間が形成されていたと考えられる。

なるほどそれは一部に公共空間とは言い難い要素を含んでいるかもしれない。とりわけコペのシャトーなどは、マダム・ド・スタールのサロンの継承であるから貴族のサロンの性格を残しており、公開性は希薄であるといえるかもしれない。だがそこに、公権力の制約をあまり受けず比較的自由に知の交流が行われる場が生まれていたことは確かである。例えばそこで当時の最先端の経済学的議論が展開されていたのは上に示したとおりであるし、その他にもそこでは、ウィーン体制下における、英国、スイスの在り方について興味深い議論がかわされていたのである。つぎに示すリカードがJ.ミルに宛てた書簡からの引用は、こうした内容の一端を明らかにしている。

「私は、彼 [=デュモン] や他の多くのジュネーヴの人たちが公の自由 (public liberty) について非常に絶望的な心境でいることがわかりました——彼らはみんな、イギリスの行動はすべての自由な原理の大敵であり、ヨーロッパ大陸の王様や皇帝たちと結託して人類を奴隷化しようとしているとして声高に不平を唱えています。政府にかんする彼らの意見についていうと、彼らはみな貴族政治の優位の方へ傾きすぎているきらいがあると思います。少なくとも彼らの推奨する方策の結果はそういうものでしょう。イギリスとこの国のあいだにはたしかに非常に大きな相違があり、そのため異なった形態が必要なのかもしれません。」<sup>45)</sup>

45) Ricardo [1952], pp.241-2.

コペのシャトーでの議論がこうであるから、ましてジュネーヴのデュモン邸での議論などは束縛のない自由なものであり、当時のジュネーヴに貴重な知的交流の場が形成されていたことが推測できる。これにはジュネーヴが、フランスとスイスさらにはサヴォワとの境界の都市であるという歴史的、地理的特殊性や当時のジュネーヴがフランスの支配から解放されて間もない状況にあったという諸々の要因が複合的に働き合っている。

さほど大きくないこの町の中に、このような場が他にも生まれており<sup>46)</sup>、それがこの地域に見られる直接民主制の伝統と相俟って、全体としてフランス国境の外側にある種の公共空間を提供し、フランスさらにはヨーロッパ大陸の公論形成に一定の影響を及ぼしていたところにジュネーヴの特徴がある。そしてこうした場の存在は、さまざまな面に影響を及ぼすが、そのうちの一つが出版活動である。

フランス語をしゃべる異国としてのジュネーヴは、フランスにとって国境を越えた地点にある情報発信源としての機能を果たしており、そこでの出版活動は、この町が歴史的にプロテスタントの拠点であったという事情もあり、古くから活発であった<sup>47)</sup>。そして転換期のジュネーヴも、フランス語書籍の出版活動を活発に行なっており、これには、英語書籍のフランス語への翻訳、出版も含まれていた。上に取りあげた論者について言えば、シスモンディが著わした『商業の富』やプレヴォが翻訳したマルサスの『人口の原理』、あるいはデュモンが編纂、翻訳したベンサム『議会戦術と政治的詭弁』(1816)<sup>48)</sup>などが、こうした出版活動の産物である。これらは、いずれもイギリスの社会思想、社会科学をフランスへ紹介、普及するという役割を果たしている。すなわちシスモンディの『商業の富』はフランスへのスミス経済学普及の一助と考えることができるし、プレヴォによる『人口の原理』の仏訳は、マルサス人口論のフランスへの導入の試みである。またデュモンによる『議会戦術と政治的詭弁』の仏訳は、ベンサム功利主義のフランスへの普及の一環をなしているのである。しかもここに言うフランスへの紹介、普及とは、当時のヨーロッパ大陸におけるフランス語の重要性を考えるなら、ヨーロッパ大陸全体への紹介、普及を意味していると考えてよいだろう。こうした出版、翻訳活動には、ジュネーヴとイギリスの精神的親近性や人的つながりが背景にあるわけだが、とりわけプレヴォの場合には、彼の家系がイギリスに密接な縁戚関係を持っていたことが影響していることを指摘しておかなければならない<sup>49)</sup>。ちなみにP.プレヴォの妻の実家はマーセット家であり『経済学対話』の著者マーセット夫人<sup>50)</sup>は、彼の義姉にあたる。

さらにジュネーヴにおける評論雑誌『法学、経済学紀要』*Annales de législation et d'économie*

46) 例えばリカードが彼の家族に宛てた手紙には、ド・ラ・リーヴ邸での集まりのことが書かれている。Cf. Ricardo [1955], pp.326-7.

47) 但しこうした出版活動は、ジュネーヴにとどまらない。

48) Bentham [1816].

49) プレヴォ家は銀行家を多く出している、その家系はイギリスにも広がっている。

50) Jane Marcet (1769-1858).



*politique* (1822) の創刊もこうした知的活動の延長線上にあると考えてよいであろう。この雑誌には、右に述べたペロ、デュモン、シスモンディが執筆しており、その他にもイタリアから亡命してきて、当時ジュネーヴのアカデミーでローマ法の教授をしていたペレグリーノ・ロッシ<sup>51)</sup>が執筆している。19世紀初めにヨーロッパの一都市でこのように活発な知的活動が行なわれた背景には、ジュネーヴの地理的、政治的特殊性がある。また当時活発に出版事業を営んでいた出版業者J.J.Paschoudの存在も見逃すことはできない。これらの事実が示しているのは、著作なり翻訳の出版に端的に示されているように、本来フランス国内で行なわれてよいはずの活動が国境を越えたところで行なわれ、ジュネーヴが、フランス語圏のメディアに対し国境を越えた地点で、知の発信、交流の場を提供していたということである。

## 結び

以上「転換期」のジュネーヴと、この町の知識人たちの知的活動に注目し、彼らの活動を手がかりとして、ジュネーヴという一都市の視点からこの時期の西欧社会経済思想の交流と展開について検討してみた。それにより明らかになったのは、まずジュネーヴという町の特殊性であった。すなわち「プロテスタントのローマ」としての性格を持つこの町は、歴史的にフランスとスイスの「境界部分」に位置する微妙な存在であり続けてきた。とりわけ転換期のジュネーヴは、「ジュネーヴ共和国」から、フランスへの併合により「フランスの一都市」となり、最終的に「スイスの22番目のカントン」へと政治的に大きく変化している。そして本稿で取り上げた3人の人物もこうした町をめぐる変化の影響を直接、間接に被り、外国での長期の遍歴を経験したり、あるいは亡命、長期滞在を余儀なくされたりしているのである。しかも、皮肉なことに、そのおかげで彼らは幅広い交友関係を築くことになる。

だがそれでは、こうした彼らの国境を越えた多様な交友関係が生みだしたものはなにか。それは、ジュネーヴを拠点としたヨーロッパ規模での思想の交流、融合、発信ということである。デュモンは、自分の人生のかなりの部分をベンサム著作の編纂、仏訳に捧げ、その幅広い交友関係を活かして、功利主義思想の大陸への普及に寄与し、さらにセーの経済思想と功利主義が接近するきっかけも作っている。またP.プレヴォは『人口の原理』の仏訳をはじめ、マルサスの思想の大陸への普及に大きく貢献している。シスモンディにしても『商業の富』や『経済学新原理』の出版に示されるように、アダム・スミスの経済学を彼なりにアレンジし、スミス流の経済学が大陸に普及、浸透する一契機となっているのである。もちろんこれらは、それぞれ別個な思想潮流であるし、またこれらの企てが成功した度合いも様々である。だが、少なくともこの時期のジュネーヴは、当時の新しい思想や知識が交流、融合、発信される場所であり、上の事例が示すように、とりわけ当時のイギリスの思想や科学知識がジュネーヴ人たちの手を経てフランスに広ま

51) Pellegrino Rossi (1787-1848).

っているのは確かなのである。その意味で当時のジュネーヴは、貴重な知の交流点であったということができるだろう。

そのうえ彼らが行なった活動は、上のような知的活動にとどまらない。ジュネーヴが独立を回復した後、1814年から上の3人はいずれもジュネーヴのConseil représentatifの一員となっている。そしてこのConseil représentatif自体は、もともとConseil d'Etatの政令のたんなる承認機関に予定されていたのだが、彼らやベロ、ピクテ・ド・ロシュモン等のおかげでその機能が強化され、実質的にはこの町の批判的議会として働くことになる。こうした面でも彼らは、ジュネーヴに影響を及ぼしているのである。

### 《参考文献》

- Bénétruy, J., [1962], *L'Atelier de Mirabeau. Quatre Proscrits Genevois dans la Tourmente Révolutionnaire*, Jullien, Genève.
- Bentham, J., [1816], *Tactique des assemblées législatives, suivie d'un Traité des sophismes politiques*, ouvrage extr. des manuscrits de J.Bentham par Et.Dumont, Genève, Paschoud.
- , [1802], *Traité de Législation civile et pénale*, ouvrage extrait des manuscrits de M.Jérémie Bentham par Et.Dumont, Paris, Bossange. (E.デュモン編, 長谷川正安訳『民事および刑事立法論』, 勁草書房, 1998年。)
- Binz, L., [1981], *Brève histoire de Genève*, Genève.
- Dumont, E., [1832], *Souvenirs sur Mirabeau, sur les deux premières Assemblées législatives*, Paris.
- Guichonne, P., [2001] *La Savoie du Nord et la Suisse. Neutralisation. Zones franches*, Société Savoisienne d'Histoire et d'Archéologie, Chambéry.
- Kitami, H., [1999], “Trois lettres inédites de Jean-Baptiste Say à Pierre Prévost”, 『日仏経済学会 BULLETIN』 第21号.
- , [2000a], “Quatre lettres de Jean-Baptiste Say adressées à Etienne Dumont”, 『大阪産業大学経済論集』 第1巻, 第2号.
- , [2000b], “Les lettres inédites de J.-B.Say adressées à E.Dumont, datées des années 1820”, 『大阪産業大学経済論集』 第1巻, 第3号.
- Malthus, T. R., [1809], *Essai sur le Principe de Population, ou Exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain* ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne ; traduit de l'Anglois par Pierre Prévost, A Paris, chez J.J. Paschoud, Libraire. A Genève, chez le même Libraire.
- , [1823], *Essai sur le principe de Population, ou exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain* ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne. Traduit de l'anglois sur la 5<sup>e</sup> édition par Pierre Prévost. Deuxième édition française très-augmentée. Genève, Cherbuliez, 1823.
- Martin, J., [1942], *Etienne Dumont 1759-1829*, Neuchatel, Baconnière.
- de Salis, Jean-R., [1932], *SISMONDI 1773-1842*, Paris.
- Potier, J.-P. & A. Tiran éds., [2003], *Jean-Baptiste Say : Nouveaux regards sur son œuvre*, Economica.

- Simonde de Sismondi, J.-C.-L., [1801], *Tableau de l'agriculture toscane*, Genève, 1801.
- , [1803], *De la Richesse Commerciale, ou Principes d'Économie Politique appliqués à la Législation du Commerce*, 2 vol., Genève.
- , [1819], *Nouveaux Principes d'Économie Politique, ou De la richesse dans ses rapports avec la population*, 2 vol., Paris.
- , [1829], “Notice nécrologique sur M.Etienne Dumont”, *Revue Encyclopédique*, octobre.
- Sraffa, P. ed., [1952], *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol.IX, Cambridge. (中野正監訳『リカード全集』第9巻, 雄松堂, 1975年。)
- , [1955], *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol.X, Cambridge. (堀経夫訳『リカード全集』第10巻, 雄松堂, 1970年。)
- 喜多見洋, [1999], 「デュモン・コレクション」, 『大阪産業大学論集』社会科学編, 第113号.
- , [2000], 「J.-B.セーと功利主義」, 『大阪産業大学経済論集』, 第2巻第1号.
- , [2001], 「ジャン=バティスト・セーとジュネーヴ」, 『一橋大学社会科学古典資料センター年報』, 第21号.
- 長谷川正安, [2000], 『私のベンタム研究——ジェレミー・ベンタムと法律——』, 日本評論社.
- ルソー, J.-J., [1979], 『ルソー全集』第8巻, 白水社.